

總會／記念講演の記録

九十九里の町工場
— 莫大小工場

平成28年4月16日の總會の記念講演として、かつて「山武莫大小」の2代目であった村松英一氏（本会事務局長）が、その工場の盛衰を熱く語った。（編）

「莫大小」とは「メリヤス」といい、「広辞苑」によると、「目利安」とも書き、「綿糸や毛糸などをループ状の編み目の集合により、よく伸縮するように編んだもの。表と裏との編み方が異なる」とある。織物は縦糸と横糸を組み込んでいくが、メリヤスは一本の糸をたぐっていくものである。

九十九里町の産業は、江戸時代より農業と漁業で、中でもいわし漁で栄えてきた。かつては早業も多く、不漁もあり、大正時代より不漁のときの副業として、生活の糧のため、木綿織物を生産するようになり、白子・白里・豊海地区に織物工場が多数できた。また、終戦後、九十九里町には小さな織物工場が少しづつ出来始めた。

昭和二十三年（三十二年）には豊海地区に米軍射撃場ができ、町の風紀は乱れ、不漁も続き、漁がなければ仕事もないという状況であった。そんな時に、織物工場、編物工場は、地域に対して「働く場をもたらした」と、小さな貢献ができたと自負している。あるとき、語弊があるかも知れないが、「我々は外から糧を得て、内に蒔く（落とす）」ということを聞いたことがある。要するに、今思えば輸出産業の加

◇昭和20年～50年のうねり

- ・昭和20年代 終戦
九十九里町に米軍基地
編物工場起こる
- ・昭和30年代 九十九里町合併
海水浴観光ブーム
東京オリオンピック
おっべしが消える
- ・昭和40年代 片貝漁港開港
大阪万国博覧会
織物工場、編物工場消える
- ・昭和50年代 オイルショック、ドルショック
織物工場、編物工場消える

「軌道」の思い出

古川 長子

軌道は、旧片貝町西の下から東金駅まで、約十キロを運行した唯一の気動車でした。漁業が盛んだった町民の利便と発展のため、当時の有志たちが協議を重ね、漸くの開業に至ったようでした。

広場を有した上総片貝駅の駅舎は、国鉄東金駅に準ずる建物で、近くの大通りまでの道は、住民の理解を得て広げられ、大型バスも通れる道路になった。

戦前・戦中・戦後ともに大勢の乗降客で、駅前には賑わいました。町民や近隣町村の人々の足となり、来遊客を乗せ、連結の貨物には海や畑の産物や加工品をたくさん積んで町を活気づけてくれました。

始発の片貝駅を出ると、西、荒生、家徳、掘上の停留所に加えて、「小学校前」が加わって五ヶ所まで乗降できたので、付近の皆さんは本当に便利で、なくてはならないものでした。

私たちが一番利用したのは東金の女学校へ通った時、太平洋戦争真っ只中でした。すべて工に關わって、工賃取りのことだと分かった。戦後は本当に苦しかった。しかし、子供たちは、貧しい中でも元気で、大人も生活苦であつたが、明るかった。

昭和三十年代になると、生活にもゆとりが出てきて、九十九里町に海水浴観光ブームが到来した。この頃の織物工場、編物工場も、信州や東北地方から就職希望者が多数来町し、町にも活気が見られた。

しかし、昭和五十年代になると、織物工場、編物工場は、オイルショック、ドルショックの対策に追い付かず、衰退の一途をたどり、昭和の世とともに消えてしまった。

（講演資料より）

好評販売中（残部少）

* 全会員が原稿を寄せ合い、作り上げた郷土誌

会誌「伊和志」（創刊号）

800円（税込み、送料別）

原稿募集

あなただの文章を
活字化しませんか！

節約の時代でしたから、運行本数も少なかったのか、超満員、通勤通学の時間帯は、押すな押すなの盛況？ぶりでした。女性車掌が窓の外から「その女学生！もつと詰めて！」と、命令調。どんなに窮屈でも、乗らねばなりません。押しくらまんに押しつぶす車内では男性の発する「そんなにおかしいでエ、お裁縫箱が潰れちゃーうー」などのお笑いもどきに、くすくす笑ってしまふのです。私たちの短い青春の「コマ」だったのかも知れません。また、若い男の人の中には、発車するデッキに飛び乗って、枠を掴んでぶら下がっていたり、隠れて連結器に乗ってしまつたり。そんな中、車内には大荷物を背負って都会に食糧を運ぶ担ぎ屋さんも。何しろ食糧も、衣類も統制でしたので、都会の人は、この運び屋さんを首を長くして待つていたことでしょう。勝つと信じながらも、厳しい戦時、もんぺ姿に防空頭布、住所・氏名・血液型を書いた白い布を胸に縫いつけての女学生は、軌道が故障すると、線路をテクテク歩いての帰宅もありました。

駅前広場では、出征兵士の壮行会が頻りにあり、区長や小学生、国防婦人会が日の丸の小旗を振って武運長久を祈りつつ、見送つたものです。窓から兵隊さんの顔が見えなくなるまで。そんな駅前広場も、戦後は娯楽に飢えていたかのように、舞台を設けての素人演芸が歓迎され、夏は夜店で賑わつたりしました。

普段は空席もあり、ガタガタ揺れながらも、下りの車窓から入る海風は、本当に涼しくて天然のクーラーでした。郷土の田園風景の中、気楽に乗れた軌道。懐かしい思い出です。今はバス路線のみとなり思いましたが、皆さんの足となつての存続と繁栄を願つております。

内容は自由で、四百字詰め原稿用紙二、三枚原稿締切日は特に決めていませんので、書き上げ次第、会長又は事務局長にお渡しください。掲載可及び不可は編集担当会で決めます（本人に連絡）。* 本会報の発行は六月と十一月を予定。

白幡八幡神社を訪ねて

鈴木陽子

平成二十七年十一月二十一日、九十九里郷土研究会の一員として、十数名の有志と共に白幡八幡神社を訪ねました。山武市白幡に鎮座し、創建は九百八十五年であるという。そこでまず、私の眼に飛び込んで来たものは、社殿の前庭に設えた御竹台に立つ、高い孟宗竹の先端に吊るされた麻の旗であった。この旗を近くで見たいと思いましたが、高さ10mの位置では、旗の形状もよく判りません。

後日、山武市役所の生涯学習課へ問い合わせたところ、毎年旧暦の九月八日に執り行われる「曙祭」の神事の一つとして、竹の先端に吊るされるという説明を受けました。選ばれた女性が、社殿の中で、いざり機を使って、織り上げた旗を見た気が持ちは、帰宅してからも強く、鎮まる事がなかつた。幸運でも言うのでなく、うか、翌二十八年四月、白幡神社の縁起の写しと、数年前に御神竹に吊るされた旗を手に取って見る機会に恵まれました。完成して、いざり機から外された時の旗は、荒い織りであったと推測します。私の手の中にある旗は、一年の間、夏の強い日差しや風雨に曝されて麻の織り目は、日に日に引き締まり、堅牢で、風格さえ感じられました。荒妙(あらたえ)とはこう言う物かと。打ち込まれた一本一本の横糸の織り目の中に、平成の織り姫(年輩者)の魂(みたま)が宿る思いがしました。

古代、神に奉仕して、機織りをした女性の伝統が、今なお継承されて、神事として生きていくことを知りました。御竹台に立てて祭られたこの旗は、村落の安泰と五穀の豊作を祈願する為に、招き寄せられた神霊の依り座であったと思う。旗の長さは房を入れて約二m、幅は四十六cm位ある。大切な物を見せて戴きました。もう一つ見せて頂きたかつたのは、県指定有形民俗文化財で、社殿の中で保管されているいざり機一式ですが、一般公開をしないと言っています。「いざり機は、高機に比べて腰を低い位置に据えて、力が入りやすから、重労働です」と織りに携わつた、老婦人から聞いたことがありまます。八幡神社の祭礼は、この他にもたくさんあります。追ひ追ひ会場へ出向いて、見学するの舞が社殿の前庭で奉納されます。休憩を入

「せつぷくろ」と「大波台」

核井宏樹

元禄十六年(一七〇三)、元禄大津波が房総半島沖M八・二の巨大地震が発生した。運悪く旧暦の十二月三十一日に当たり、寒さから凍死した者が多かつたと聞いて居ります。津波の恐ろしさで、私の住む真亀上地区の南部に位置する処に高台がありました。定かではないが、地震が来たら、すぐ高い場所へ逃げることを思い、人工的に土砂を積み上げて造成したのだと考えられます。地元の人々は、この高台を「おおなんだい」と呼んで居りました。この高台も、昭和二十九年(一九六四)からの土地改良事業により、全部トラクタで土砂は崩され、平坦地に変わり、田畑になりました。又、すぐそばに池があり、「せつぷくろ」と呼んで居りました。恐らくこの池は、高台を作るため、掘られたのだと思います。小学生時代には、その高台に駆け上つたり、池で水浴びをして遊んだことを思い出されま

昭和十九年(一九四四)、戦争も激しくなり、東金市の豊成地区に軍用飛行場があり、アメリカのB二十九やグラマンが茂原の飛行場へ行く途中、私達の水浴びの少年に爆撃し、幸いにして一人の犠牲者もなく、助かりました。その日、近所の民家も二軒、爆撃に遭い、母屋の柱に弾丸の跡が残されたと聞いて居ります。やがて、大東亜戦争も終止符となり、私達の青春時代に青年団が発足し、当地の青年男女で「せつぷくろ」を開墾し、田植えをしたり、秋には稲刈り作業をして、取れたお米の代金は、会の収入源に繰り入れられました。その会員も高齢となり、七十五歳から八十

れて、二時間の長丁場ですが、私もこのお祭りの中に参加して、無病息災を祈願します。祭礼のものもありまますので、なかなか奥深い神事だと思ひます。初めて訪れた神社ですが、この神社の祭神の一本柱であられる、私の好きな「木花開耶姫(このはなさくやひめ)」の先導を賜り、貴重なたまげを頂きました。姫様は、大変美しい神だと思ひます。*参考資料 古山豊『白幡八幡神社の祭礼と民俗』

専務員日記

記/村松英一

- 4月1日 総会開催通知の発送
 - 4月1日 総会資料の作成
 - 4月16日 総会資料の印刷
 - 4月16日 平成28年度総会記念講演
 - 4月24日 九十九里の町工場 講師 村松英一氏
 - 5月21日 会報編集会議
 - 5月21日 第2号の企画・原稿依頼
 - 5月21日 史跡散策の資料印刷
 - 5月21日 史跡散策(横大道) 案内 村松英一氏
 - 5月31日 6月例会の資料印刷
 - 6月4日 会報編集会議 校正
 - 6月18日 6月例会
- 私の少年時代II 講師 木島里八氏
- 会報第2号発行

あとかき 平成28年度に入り、本会は齊藤功氏が都合により会長を退き、代わって内山いつ氏が3代目会長に就任した。何事にも自らが突進していくタイプの会長だけに、事業が消化する会から新たな事業を生み出し、飛躍する会へと変換されるのではないかと期待する。また、本年度から町長の矢野氏が会長となった。九十九里町を元気にさせるため、本会は何をなすべきか？我々会員に与えられた大きな課題でもある。例えば、「片貝海水浴場の恩人」の中西月華宅(旧中西薬局)を記念館にする運動、そして、高村智恵子が療養した「田村別荘」の再建と資料館づくりなど、本町にも他に勝る歴史的资源があり、それをどう生かすべきか、共に考えていきたいと思う。(本保)